

195.3

A 44

MZ

19440

45°N

40°N

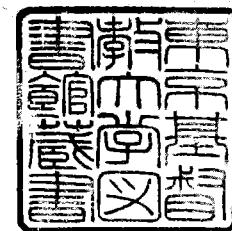
35°N

30°N

25°N

# アメリカ文化 事典

アメリカ学会 [編]



丸善出版

## キリスト教神学者

Christian Theologians

アメリカ文化に影響を与えたキリスト教神学者は枚挙に暇がない。なかでも注目に値するのは、1930~60年代に活躍したラインホルド・ニーバーとパウル・ティリヒであろう。彼らは教会や神学という限られた領域を越えてアメリカ社会の直面する多くの問題に取り組んだ。そのため彼らの思想や著作は、政治、経済、心理学などの学問領域はもちろんのこと、広く大衆文化にも影響を及ぼすことになったのである。

◆**移民の子ラインホルド・ニーバー** ニーバーはドイツ移民の子としてミズーリ州に生まれ、21歳でイエール大学に入学するまでドイツ語文化圏で育った。『キリストと文化』(1951)で知られるH.リチャード・ニーバーは彼の弟である。デトロイトで牧師となった彼は、移民の共同体をアメリカ社会に同化させようと尽力する。特に第1次世界大戦中には、彼の教派によって設置された戦時下福祉委員会の総幹事としてアメリカの外交政策を宣伝した。しかし戦後のヨーロッパを視察したニーバーは、理想主義と現実の矛盾に気付くことになる。国内でも、自動車会社の労働者に対する不正と搾取、そしてそのような悲惨を無視する教会の矛盾に目が開かれ、自国に対して厳しい批判を展開するようになった。

1928年にニーバーは、ニューヨークにあるユニオン神学大学院に倫理学の教員として招聘される。この時期にマルクス主義の強い影響を受けるようになる。しかしこれは、社会悪の原因を人間の実存に見いだすようになる。ニーバーによれば、人間の根源的な問題はみずからを神の座に置こうとする傲慢さにあり、その傲慢が国際関係における帝国主義、経済における搾取、人種差別を生む。そのため、人は神の赦しを十字架に見いださねばならず、そうすることで自己欺瞞を悔い改め、他者への犠牲的な愛を実践できると彼は主張した。

このニーバーの立場は戦時中にキリスト教現実主義として発展していく。罪を軽視するリベラルなキリスト者たちは、ナチスの脅威を理解できず、平和主義を唱えていた。それに対してニーバーはローズヴェルト政権を支持し、アメリカの参戦を訴える。しかし彼はこの戦争を義戦と見なしていたわけではない。むしろ戦争の悪を理解した上で、より少ない悪を選ぶという現実的、かつ道徳的な決断だったのだ。それは、原爆の開発をやむを得ないものとしつつも、日本への投下を批判した事実からもわかるだろう。このような傾向は冷戦になり強まった。国務省の政策顧問となった彼は、ソビエトとの戦争を回避しつつも、封じ込めを主張する政治学者ジョージ・ケナンの立場を支持し、その喧伝に一役を担う。

52年にニーバーを襲った心臓発作は彼の体にしびれと言語障害を残した。そ

れでも彼の活動は止むことがなく、この時期、黒人の市民権運動やベトナム戦争への反対運動にも参加している。ちなみにマーティン・ルーサー・キング・ジュニア(キング牧師)によれば、彼の非暴力の立場はガンディよりもニーバーやティリヒの影響を受けたものであったという。他にも、世俗化論者ハービー・コックス、フェミニスト神学者メアリ・デイリー、黒人神学者コーネル・ウェストなど、彼らに影響を受けた神学者は数知れない。

◆**亡命知識人パウル・ティリヒ** ティリヒがニーバーの所属するユニオンで教鞭をとりはじめたとき、彼はすでに47歳であった。母国で彼は神学・哲学者としてすでに十分すぎるほどのキャリアを積み上げていたが、アメリカではほとんど知られておらず、すべてを新しく始めなければならなかった。だが彼は、懸命にアメリカ文化を分析し、みずからの思想が受け入れられるような工夫を重ねた。こうして彼は、1940年には終身雇用を保証する教授職に就くことができたのである。それと並行して、困窮する亡命知識人のためにも援助を厭わなかった。さらに彼は、42~45年まで政府に要請され、ドイツ国民に向けて「アメリカの声」という戦時宣伝放送の原稿を書き、ナチスに対するアメリカの戦いに貢献した。

戦後ティリヒはニーバーとは対照的に、政治や社会活動から身を引き、心理的な問題に关心を寄せていった。40年代には、ルース・ベネディクトやエーリッヒ・フロムらとともに心理学の研究会を盛んに行っている。その働きは、52年に刊行された『存在への勇気』に結実した。この著作は、絶望や死、そして意味の欠落など避けられない実存的な不安について語り、そのような不安の中で出会う神のうちに勇気を見いだせるとティリヒは言う。このメッセージは多くのアメリカ人の琴線に触れ、たちまちベストセラーとなった。

55年にティリヒはユニオンを退任しハーバード大学へと移り、そして62年からはシカゴ大学で教鞭をとる。大学での教育に加えて、彼は各地で講演に呼ばれ、さらにはテレビや雑誌などのマスメディアに活動の幅を広げていく。核兵器に関する討論番組でヘンリー・キッシンジャーと語る一方で、『ヴォーグ』には写真つきのスタイリッシュなエッセイを寄稿するなど、時代の寵児としてもてはやされ、まさに文化的なアメリカンドリームを成し遂げたのである。

◆**アメリカ文化を刷新する神学者たち** この2人は外部からアメリカ文化を刷新するのに成功した。ニーバーは、地理的にも文化的にも辺境な中西部の移民共同体からアメリカ文化の中心に躍り出た。ティリヒもまた、亡命知識人としては類を見ないほどの成功者である。それが可能であったのは、外部からのまなざし、すなはちマルクス主義に基づくラディカル(急進的)な社会批判、そして伝統や慣習を突破できるキリスト教思想の読み直しがその源泉にあったからであろう。だからこそ彼らの言葉は、戦後アメリカの新たな文化を形成する原動力となり得たのだ。

[加藤喜之]